volume 144

変わる日本の「暮らし」と「まち」

鹿児島市マイアミ通りで進む歩道利活用に向けたチャレンジ

「歩いて楽しめるまちづくり」実現に向けた支援　鹿児島県鹿児島市

2021年●令和3年～

阿部民子 text by Tamiko Abe
illustration by Shigeyuki Sakata

鹿児島県の県都、鹿児島市。中心市街地は、九州新幹線発着点の鹿児島中央駅、南九州一の繁華街である天文館、桜島の景観を有するウォーターフロント（本港区）から成り、この3エリアが連なる都市軸がにぎわいや観光の核となっている。

天文館と本港区をつなぐのが、「マイアミ通り」だ。名前の由来は、鹿児島市とマイアミ市が姉妹都市盟約を結んでいることから。路面電車の曲がり角、いづろ交差点から海側にまっすぐ続く道は、花壇の花に彩られ、時折、汽笛が響いている。

2024年11月24日の日曜日、この通りで「マイアミフェスタ」と称したイベントが開かれた。350mの沿道にはキッチンカーや新鮮野菜、スイーツなどの出店が並び、ストリートミュージアムとして各種作品も展示。今回試行的に山形屋駐車場に設けられた巨大な塗り絵を楽しんでいた5歳の女の子のお母さんは「大きい絵を描く機会がないので、心置きなく描けて娘もうれしそう。子どもが遊んでいる間にお店をのぞいたり、買い物したり、通りを歩くのも楽しい」とか。

○歩いてまちの魅力を知る

「近年、中心市街地では再開発事業が盛んで、鹿児島中央駅前に『ライカ1920』、天文館の中心に『センテラス天文館』という複合施設がオープン。本港区ではスポーツ・コンベンションセンターが計画中など、次々と各エリアの拠点整備が進んでいます。鹿児島市は、これらの拠点をつなぎ、まちの魅力や来街者の回遊性を高めるために、『歩いて楽しめるまちづくり』に取り組んでいます。マイアミフェスタもその一環で、将来的な歩道のリニューアルに向けて、どのような使い方ができるかを試みる取り組みのひとつです」と話すのは、鹿児島市市街地まちづくり推進課、岩山和史さんだ。

鹿児島市が事業を推進する上で心強いパートナーとなっているのが、UR都市機構だ。両者のつながりの始まりは、2021年。URは、市から天文館地区活性化に関する相談を受け、22年にまちづくり法人の設立や社会実験「照国ホコ天」などを支援。その成果から、23年に「歩いて楽しめるまちづくり」の推進を目的に、市との連携協定を締結した。以来、マイアミ通りの検討を開始し、社会実験「第1回マイアミフェスタ」に参画。24年には加治屋町と高見馬場交差点で開催されたポケットパーク設置社会実験「やどり木パーク」にも企画段階からかかわるなど、支援を重ねてきた。マイアミ通りでは、24年5月に市が地元に呼びかけ、マイアミ通りの将来像を話し合う官民学プラットフォームとして「まちづくり協議会」を設置。URは毎月の会議運営を担うことで、市と住民、事業者、学生などとの連携を後押しし、徐々に地域を巻き込んできた。

URの久保田絢子は「鹿児島市さんが素晴らしいのは、まず試行実施をして、計画や整備を考える手法を大事にされていることです。それに対してURは全国での知見や経験を基に、社会実験の実施方法やデータのとり方などを多面的に助言、お手伝いをしてきました」と話す。

○住民が主役に

今回の「マイアミフェスタ」が前回と大きく異なるのは、第1回が市主催だったのに対し、沿道地権者や周辺住民、鹿児島大学などから成る「まちづくり協議会」主体で企画から運営まで行われたことだ。協議会メンバーの提案から生まれたテーマは、「五感でふれる作品展」。ユニバーサルデザインの考え方をもとに、県立盲学校生徒による書道パフォーマンス作品の展示やアロマと点字を合わせた絵画、歩道と沿道敷地に絵を描くチョークアートなどが、通りを歩く人の五感を楽しませた。

なかでも人気だったのが、鹿児島大学の学生たちの運営によるリーガルウォールだ。リーガルウォールとは、通常は落書きできない壁面をキャンバスにして、合法的に絵を描くことで、沿道企業の協力のもと、壁面に貼った大きな布の幕に「マイアミ通りの過去と未来」を自由に描いてもらった。鹿児島大学持続型地域計画研究室修士1年の山本健世さんは「たくさんの方に楽しんでもらえたことはすごくやりがいを感じました。このイベントで鹿児島やこの通りを知ってもらい、まちづくりにも役立つとうれしいですね」と話す。

URの久保田は「今回の実践によって、周辺店舗の参加も増え、関連団体などとの新たなつながりが生まれました。場所も関わる人も、もはやストリートにとどまらない輪が広がったのが非常に有意義でした」と成果を語る。

協議会のメンバーたちからも「通りの活性化には、すごくいいチャレンジ。ここは天文館からつながる重要な通りなので、さらに発展するよう活動していきたい」という声も上がっている。「マイアミフェスタを継続開催できたのは、関係者の皆さんの協力があってこそ。こうした取り組みを持続的に行いながら、地元主体の体制づくりを考えていく必要がある。今後も、まちづくりに関する高い専門性や多数の実績を持つURさんと連携し、歩いて楽しめるまちづくりを推進していきたい」と岩山さん。住む人、訪れる人、それぞれが歩いて楽しめる通り、まちへ。官民学連携の試みは、これからも前を向いて進む。

鹿児島市中心部を通る「マイアミ通り」とその近隣で開催されたマイアミフェスタ。

街に、ルネッサンス
UR都市機構
［企画制作］新潮社